
幻想郷がうまれた日

ほたるゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷がうまれた日

【ZPDF】

N1785G

【作者名】

ほたるゆき

【あらすじ】

博麗の巫女には不気味な言い伝えがある。それは、三十歳になつたら消えてしまうというものだった。その言い伝えにおびえる霊夢は、気を紛らわすため、神社にきた八雲紫と話づける。なぜこんなにも彼女はおびえるのか。それは、その日が一十九歳最後の夜だから。

博麗の巫女には不思議な言い伝えがある。言い伝えといつても、いいものじゃない。むしろ悪い。いやいや、最悪かもしだれない。

博麗の巫女は、三十歳になるとビリに消える。

なんともまあ、不気味な言い伝えだ。笑い飛ばしてやうと先代、先々代、さらには歴代の巫女の記録を家中をかして調べた。友達の妖怪がつけてくれたらしい記録書。それが見つかって。興味に背中おされてページをめくる。どつと汗があふれ、手についていたそれが紙を少しづくらませ、いびつな形になつた。

本当に三十歳になつてから記録がない。

このままやめでは、本当に信じることになる。それがいやでさらには探すと、日記を見つめた。几帳面な巫女が書いたものらしい。毎日の記録がきれいに書いてあつたけど、突然ツツリと白い海が広がつた。汚れてすらいない。まさしく、開いていない状態そのもの。

この巫女はわざに余計なことをしてくれた。白紙になる前のページに、「明日から三十路」と書かれていたのだ。

神隠し？ 巫女が？

ありえなさそうなことを考え、それでもないと思った。ここ幻想郷なら何でもおこりえる。

とにかく、わたしは普段こんな難しいことは考えない。でも今日

は考えている。それはなぜ？

だつて、今日が一十九最後の夜だから。

そう。わたしは明日、三十歳になる。

博麗の巫女が神隠しにあう、その歳になるのだ。

【幻想郷がうまれた日】

今夜は寝巻きには着替えなかつた。

博麗の巫女が いや人間が、とつぜん跡形もなく消えるなんて 考えられない。それに、少なくともわたしは自殺なんてしない。つまり、だれかの仕業なのだ。着替えないのは、襲つてきただれかと戦えるように。

いつもよつにぶい直感がおしえてくれた。かならずわたしの身に 何かがおこる、と。

普段は気を払つていない押入れも含めて、周囲に視線を刺すよつに投げる。

今のわたしはとてもステキな巫女とはいえないような、おそろしい顔をしているでしょうね。でも、これがせめてもの抵抗。

ゆつくつと深呼吸。落ちつきなさい、靈夢。大丈夫、わたしは今までの巫女とはちがう。消されたりなんかしない。だいじょうぶ、だいじょうぶ……。

……そうだ、お茶をのもう。落ちつくなまようじい。
しのび足で台所へと向かい、やかんに火をかける。まだ時間がかかりそうだ。

わずかに天井へと上る湯気が、気持ち悪いほど不気味な形をしていたので、目をそらして居間へと戻った。

そのままいると、湯気につつまれ、いつしょに消えていたかもしれない。

わたしは、だんだんと追い詰められている。

家がきしむ音。それにいちいちビクビクしてしまう。誰かがみたら「馬鹿みたいだ」と笑うだろう。そうに決まっている。だって、わたしでもそう思うもん。いま自分のやっていることが馬鹿みたいでしうがない。

この場所からでていきたい、と何度もおもった。

神社から逃げて誰かに家に逃げ込むことも考えた。でもそうしたら三十になる前に妖怪に襲われて消されるかもしれない。それに、正直はずかしい。

魔理沙の家なんて逃げたら、きっと一生からかわれる。

つまり、ここがいちばん体からしても、社会からしても安全。逆にいえば、まわりに助けをよべないこの状況で、一人で戦わなくてはならない。

長い夜になりそうだ。

とつぜん台所の方から大きな音がして、おもわず小さく叫んだ。自分の声が他人の声のように聞こえた。

でもよく考えたらわざわざ、やかんを火にかけていたのだった。何てことはない。ただ単に、お湯がわいたのだ。

ああましい、わたしやつぱりすこし怖がつていて。正体のつかめない何かが、ゆっくりと近づくのが怖い。

なんで今日に限つて、こんなに直感がはたらかないんだろ。いつもは何となくはたらくのに……。

わたしはいつも直感のおかげで、輪郭はみえなくても知らない何かのことをなんとなく知っていた。でもそれがいまはわからない。それが怖い。

わたしを襲うなにかは、さっきの湯気のような形をしているのだろうか。それとも、はつきりとした形をしているのだろうか。

いまこの時も、しおび寄つているかもしれない。黒いナーナカガユつくり、と。

それはやがてわたしの体を包みこんで

「ひゃあつーー？」

両方の肩になにかをおかれ、心が跳ねあがつた。なんだ、なんだこれは、手のような形をしていた……！ ちがう、まちがいなく手そのものだった。

体が一瞬でひえる。いや、凍る。

「いや、やめてー！」 そう叫ぼうとしたのに、のどが渴いて声がでない。必死に暴れると、ぱつとそれがはなれた。

「……ふ、『じめんなれ』。ちょっと怖がりさせすぎたみたい」

「これから何がおこるのか、まったくわからなかつたわたしは、その高く、おちよぐるような声に一瞬力がぬけた。

私よ、と言いながら前に回りこんできたのは、いちばんとは言え
ないかもしぬないけど、かなり上位にランクインするほど会いたく
ない奴。

安心のあたたかさが体にまわると同時に、それがいきすぎであったまにボーッと熱がこもる。

いつそ殺して呑しきなる凶鳥の瞬際だった。

いちばんこのよくなはずかしい姿を見せたくなかつた相手は何かを言おうとして、笑つてそれができなかつた。けつきょく苦しまぎれに

「かわいかったわよ靈夢」「それを言うなあー！」

といいだした。いまずぐ夢想封印プラス殴りたい。

でも、紫が来てくれて不思議と安心したのはどうしてかな？

不気味にわらう紫の姿に、姿の見えない黒い何かが消えたような気がする。いつもは「いつしへ思ひ紫の変な笑顔は、この上なく頼もしく見えた。

スキマに片足を突っ込み、今すぐにでも帰らうとする紫に十杯く

「うごね茶をやしだした。

「うんに飲めないわ」

「飲むまで帰らせない、それ高いんだから」

洋服をつかんでひっぱると、紫は「服がのびちゃう」と叫びてスキマをとじ、「うかうか」もどつてきた。あきらめたらしく。とおもつたら、やつれと同じ不気味な笑いを浮かべた。すこし意地悪にみえる。

「うごほしこのへ..」

「.....」

「うごほしこのね」

こつわせつゝとひしほ思ひ紫の変な笑顔は、うの上なづれひたく見えた。

でもうじで帰られてしまひのせ正直いやだ。

だからしかたなく、小さくうなづいた。本当にしぶしぶと。

紫は「素直なのはここのとむ」と勝ち誇ったよつと笑つた。うつとこわは嫌いだ。

「嫌われものは帰るとするわ」

「すこしだけ好き、好きだからー、今だけー」

心を読むとうごめきり……こや、好き。

「まあ、いいでしょ?」

……むかつかない。

『紫とす』す時間は、いつも以上にみじかく感じた。

『気づけば夜の暗い空にはけ田がドキドキして、だいだい色に光っている。本当にどうでもいい話しかしなかった。

でもその時間は、十分すぎるほど大切な時間。だとこうのに、まるでぽつかりとそこが消えたように感じるほどはやい時間の足に、おもわずなごり惜しさを感じた。

「もう朝ね」「まだはやいわよ」とこうひひでもいい会話をする。でもこの時間もまた、大切な時間となるのだろう。なんとなく、そんな気がする。

「そうだ靈夢」

「ん?」

「夜も明けたわね……お誕生日、おめでとうー。」

言いおえた紫が一瞬真っ白な煙につつまれた。

けれどもすぐにそれは晴れてしまう。

白い煙の向こうには、にっこり笑う紫と鮮やかな白色と紅色のバラがあった。

『お誕生日おめでとう、靈夢』と書かれたメッセージカードがついていて、まるで、これがわたしだけの色だと言つかのよ。普通のバラにメッセージカードと、にっこり笑う紫をしただけ

で、こんなにも特別になるなんて思わなかつた。

「紫……あらがとつ」

「ほり、大切な時間になるとこゝ考へ、ちやんとあたつた。

わたしは今日一日紫と話をしていただけなのに、なぜか心がおどり、その疲れが体にきたらしく、心がつかれるようかはいいか。

「ねー紫ー、わたしの境界いじつたー？ すくなく体がだるいんだけど」

「歳よ歳」

「お前に言われたくない」と突つ込み返されても文句は言えないことを、堂々と言つてくれる。「お前は何倍生きてるんだ」という心用もきく。

はかるのも馬鹿らしこくらこ高く生き、愛されてきた妖怪が言うつなせりふではない。それはまるで、幻想郷の母だと表現されるくらいい。

……さて、なんで突然こんなことを思つたんだら？

『誕生日プレゼント』と言われた、紫の作った夕食を食べたとき、すこし心にじーんときたからかも知れない。

わたしはあまりにも長くの時間をひとりで過ごしてきました。いつか

らここにいたのか覚えていないくらい。

会った記憶すらもないけど、お袋の味っていつもやつかな。男が言つてるのはきくけど、女のわたしにもじーんとくるものだなんて思つてもみなかつた。

「靈夢、お風呂沸いたわ。
「ああ、ありがとう」
入っている間にお布団敷いておくわね」

幻想の中の母を紫に重ねると、ちょっと切なくなつてしまつた。
いや、うれしかつたのかな。よくわからない。

まつしろなお布団に入り、横になる。紫はまだいた。「そろそろ帰らないのか」と聞こうと思つたけど、寝る前の話し相手になつてもらおうと思つたので、それはやめておいた。眠い。でも、今日一日も寝ずにすごす自信はある。大かんげいだ。

じゃあ即実行ね。

さて、何の話をしようか。と考えるふりをしたけど、実はもう決まっていた。

「ねえ紫「うん?」

「あなた、博麗の巫女の話……知ってるでしょ？」

「ええ、三十路になると遅れるって奴ね。不思議よねえ、あなたたち霧か霞？」

紫がふざけた調子で言ひ。でもこれは無視する。はなしを運ぶ権利は、今はわたしのもの。

「……こつものことから考へるといろいろ直感が働くんだけじね、不思議だわ」

朝から、心のなかのどこかではずっと考へていた。昨日も考へていたけど、いまは恐怖がない。

そのおかげで冷静になつたあたまは、昨日は思いつかなかつた、博麗の巫女が消える理由を知る方法をやつとこに見つけだした。その方法とは、もちろん、

「ねえ紫。あなた知らない？」

紫に聞くことだった。

長年生きている彼女なら、何かしつているんじゃないかな。

紫は観念したように、舌をちこちこ出し、そしてことばをわたしのまへと伸ばした。

「直感、はたらいてるじゃない」

やはつせうだつたか。でもこれは直感じゃないよ。なんとなく、そんな気がしただけ。他の人がきいたらびつたりつかじらなこけど、直感とはまたちがう。

真実は、ずっとわたしのそばにこで一ノ口一ノ口笑っていたのだ。

「ねえ紫、わたしは永遠に博麗の巫女じやなかつたの？」

「ええ、もちろんよ」

矛盾。だところのに、なぜいつも説得力があるのだ？

「ねえ。歴代の巫女たちをどうしたの、食べた？」

「つぶら」

扇子をひらげ、口元を押されて笑う。扇子にはねかえつた声が天井くとのぼり、部屋中をぐるりと走り回つた。年寄りだとは思えない聖母のような声だとこの辺で、耳にべつとりとほりついて離れない。いやな音を聞いたときのような気分だった。

「はあ…… もう、好きにしなさいよ」

呪いの元凶はここにあつた。すぐにでもわたしあつた先ほじまで母だと思つていた彼女に殺され、歴代の巫女のようだに神隠しにあつた、と思われるだろう。

「これも博麗の血だからか、すこしも恐怖感がない。自分のことだとこの辺で、ほんとうにどうでもよくなつていい。お賽銭箱の中身のぼうが気になるくらいだ」

「あつたくもう、騙すなんてひどいわよ」

「いちご飴だと言われてハツカの飴を渡されたときのような、軽い非難しか言葉にできない。紫を憎むことができなかつた」

紫はすこしあみしそうに笑う。何か悪いことを言つたのかとおもつたけど、今から自分を殺す相手に同情する必要もないか。

「ん？」

紫はさみしそうな顔のまま、額に手をおくとこゝ、意味不明なことにはじめた。

自分を食べる準備かと思つたけれど、母親が風邪をひいた手も熱をはかる時のように、優しい手ついた。

紫の手は冷たくも暖かくもなく、ちょうどいいくらい。そのちょうどいい手がゆっくりとなれるように動かされる。この時間に永遠にしがみ付きたいくらい、たまらなく気持ちがいい。

「食べるためには、いつこう皮肉だった。紫はまた小さく笑う。けれど、すぐに彼女は表情を慈しむようなにもどして、真剣さが混ざった声をのどから滑り出した。

「ねえ靈夢

「ん？」

「いま、歴代の博麗の巫女が消えた理由を教えてあげるわ」「食べたんじゃないの？」

紫が手をじけた。「ああ……」とこゝ切ない声がでてしまつ。もつとなでていてほしかつた。

……あれ？ なんだか。紫から手を離された場所が、すこし熱い。そう思つたのもすこしだけ。すぐにそれは、全身に波のように広がつていいく。すべてを焼きぬくすような、地獄の炎ではない。

冬の朝の布団のよつて離れるのがいやになるせいで、ことねっこ

ぬくもりだ。

そのぬくもりはやがて光を放つ。体が光るように感じる。なにも見えない。まっしろだ。どうしたんだろう、何がおこったんだろう。

疑問が不安になるほんの直前。霧が晴れるように、ぱっと明るくなつた。白い世界にいたのだから、明るくなるといつのは正確には変かも知れない。でも、まちがいじやない。

かわりに目の前にうつるのは、緑の世界、たくさんのお家、そして神社があるはずの高地。

それは間違いなく、空の目が映す幻想郷だった。

いまとはすこしちがう。でも、まちがいなく幻想郷。

眠つているかのように静かな世界は、まもなく終わろうとしている。

どこからともなくあらわれた水が、幻想郷の大地をふみつぶす。あつという間にあたりは真つ青になつた。

ふつと田の前がもう一度白くなる。

次にあらわれた幻想郷は、さつきと同じように静かだった。時が戻つたかのように感じた。

しかしその平和も長くは続かない。大地が割れ、地震が幻想郷を襲う。幻想郷が死ぬ、その時をみているかのようだった。

これもまた、すぐにおさまる。白くなつた世界の間に何があつたのかは知らないが、白い世界が無くなればいつものように平和になつている。

異変、平和、異変、平和　何度もその光景を見せつけられた。わたしが知つている異変はひとつもない。だつて、わたしが知つている異変はもつと平和。霧だとか、花が咲くとか　。

考えの途中だといふのに、次の世界があらわれた。平和な幻想郷だ。でもひとつちがつ。何もなかつた高地に、神社ができている。博麗神社だ、と確信した。

そしてそこに、小さい女の子をつれた金髪の女性が入つていく。一人とも背をむけている。すぐに金髪の方の女性は出でてきた。こちらから顔が見える。その顔に気づいたとき、驚きの声が思わず飛び出した。

「紫ー？」

まちがいなかつた。

「紫、紫、紫！」何度も叫んだ。だといふのに、彼女は耳をかそうとはしない。まるでわたしがいなかのようだ。

そこで、失くしていた最後のピースが静かにはまつた。思い出したのだ。すべてを、いま。

その瞬間に幻想郷にひびが入り、黒い光がでてきたのであせつた。でもその訳に気づいて安心した。そのひびは、わたしにしかみえていないから。

はがれるように崩れた幻想郷の向こうには、わたしが紫と話して

いた部屋が映つていた。

「やっぱりあなた、直感がすごいわね。これだけのヒントで思い出

「たんて」

ああ、まだ。これで何度も目になるのだろう。

しやあテアトね
靈夢 博麗の巫女さん。あなたの、本当の名前は?」

「二三にひいてきた。せう何度田にまわ、ひだりで四通向いさせられました」といふ。

わたしの真の名前を、いまあなたに伝える。

「わたしの名前は 幻想郷上

「ええ、やへだれもつた」

一気に情報量が流れこんできて、整理するのが大変だ。でも最初に来るのはやはりこの言葉。

「今回も思いだせなくて、『めんねおぬさん』
「いいのよ、それは博麗の巫女のさだめだもの。
もちろん、異変を解決することもね」

博麗の巫女は、異変にだれよりもはやく駆けつける。それは、わたくし自身が幻想郷だから。

昔から、幻想郷には異変が絶えなかつた。このままでは幻想郷が滅びてしまう。だから幻想郷は、博麗の巫女という、自分の力をわけあたえた存在を作り出した。

わたしが直感で異変の場所にたどりつけるのは、かんたんなど。自分の体の痛いところが、わからないなんてことはないから。

「今回もあなたは立派に育つてくれたわ」

紫がもう一度、あのなで方で額をなでてくれる。ずっと昔から、彼女はこうしてくれていた。それがどうしようもなく嬉しかつた。母のぬくもりを確かめることができたから。

わたしを育て、守つてくれた母はいまこの瞬間、もっとも愛に満ちている。

人間だろうが妖怪だろうが等しく持つ、子に対する愛。でも、それもそのはず。わたしはもうすぐ、消えなくてはならないんだから。

幻想郷が与えてくれる力は限られている。与えられた時間は三十年。それはわたしが持つ力を使い果たす時間と同じ。今日ほとんど直感が働かなかつたのは、もうほとんど力が残つていなかつたから。

「ねえお母さん、わたし……」

「わかつているわ。行かなくちゃならないんでしちょう?」

じつは三十年といつ短い期間なのだ。それ考えたことがある。

でも、最近は紫に対する配慮じやないかと思つた。わたしがすべての記憶を思い出すのは、三十歳の消える間際。その瞬間を少しでも長く、ということなんだ。

「辛くないの？」

「もちろん辛いわ。どんなにがんばっても、あなたは私のことを覚えていないんだもの」

それに、あなたはとても手のかかる子なのよ、初代の「ひかり」「そうなの」

「ええ、おしめを代えようとしたわたしは、おじつをかけた時は見捨ててやるのかとおもった」

苦笑にする。そんなことがあったんだ。

「こんなこともあつたわ。

あなたのためにわたしは冬眠を縮めた。で、久しぶりの再会のときあなた、こう言った。『お母さんじゃない』ってね。

冬眠しているときは藍が育っていたから、わたしのことをすつかり忘れてたのよあなた」

うわ、それはひどい。母として深刻なくらい心に傷を負つただろう。

う。

でも、おもしろい。お母さんだつて、そんなに悲しそうな顔はしないな。『よよよ……』ともかくした口元は笑つているし、ちこちく震えている。

おたがいに笑いがたえられなくなつて、大きく笑つた。これから

くる理不尽で残酷な現実を吹っ飛ばそうと、ひたすら笑つた。心の涙をふきとろいと、近所に迷惑なくらいにやかましく笑つた。

笑いながらも、時間は流れる。

まず体が光りはじめた。もうすぐわたしはすべての力を使いはたし、ふたたび幻想郷とひとつになる。そしてまた、博麗の巫女として生まれかわるのだ。

もう、一人ともほとんど笑つていなかつた。でも悪いことじやない。

それよりも価値のある、微笑みを選んだんだから。

「面倒だと思うけど……幼い次のわたしをよろしくね」

「ええ、私以外に任せらるなんて許さない」

そのことばはやさしい愛をたっぷりとつぶんだ、しつとつと滲つたことばだった。

「ふふつ、ありがと」

軽くだけど、最大級の感謝をつたえた。ちゃんと受け取つてよね。背中にも、力をたっぷりこめた声をおくろい。お母さんが、次わわたしのためにもう一度走れるよつに、背中をおそつーだから力強く、わたしは叫んだ。

「じゃあまたよろしく、お母さん！」

「ええ。またね、もうひとりの幻想郷、わたしのかわいい娘ー。」

体が光に包まれる。もつひとりのわたしが、わたしを迎えてくれたらしい。もう何度もなることだけど、かかせずやつてくれる。わたしとちがつて律儀だ。

その上氣を利かせてくれる。光がやがて、何も見えなくしてくれる。

「これでいいんだ。光の向こうにあるお母さんの顔を見たくないから。

あ、うれしい。お母さんがわたしの額をさつきみたいになでてくれている。わかれのしるしには、ちよづじこかもしない。

あれ、これはべつの贈り物かな。数えきれないの恵みの雨が、わたくしの顔に落ちる。

まつたく、贈り物ならもつといいものにしてよ。具体的にはお賽銭とか。

本当こじょうがない母ね。もつ何度もになるのかしら。

……つと、いけないいけない。そんなことを考えていながら、わたくしもだ。いつたい何度もになるのよ。

何度もにもなっている、なっているのに、やっぱりこれだけは慣れることが多い。

ああもう、今回も我慢できなかつたか。

これはお母さんが悪いんだからね。

お母さんのせいで、わたしまつといつ。

いまそこにはあつたすべてのあたたかい額がすりつとなくなり、ぬくもりだけが手にのこる。

靈夢はついに、幻想郷とひとつになった。

彼女はきっとあがくけれど、次の靈夢はわたしを覚えていない。三十年後のこの時だけ、あの子はわたしを思い出す。この時だけしか、思い出せない。

そう考えるとやはり悲しくなってしまう。

でもそれが博麗の巫女の宿命なのだ。

あー、ざんねん。今回も耐えられなかつた。次こそは、絶対あの子に雨なんて降らせてあげないから。

そうしないと、あの子が安心してひとつになれないじゃないか。よし、次こそは、次こそは！

次からだから。次からは、眠る子を見守る母のよひよひ笑顔をずっと向けていてあげるから。

だから、だからね。今だけ……許してね？

感情はまだおさまらず、目をおさえたままスキマを使つて家に帰つた。

藍と橙は『氣を利かせてくれたのか、わたしの部屋に入ろう』とはしない。

一人に感謝しながら、自分の部屋すべての悲しみを心から追いだした。

それから間もなく。そのときがきた。だれよりもはやく、わたしはそれに気づく。

今だ、と思いスキマを開くと小さな女の子が中からでてきた。確かめるまでもない。あたらしい博麗の巫女だ。さつきの巫女と

は違ひ、かがやく光をもつた新しい命。

「覚悟しなさい。わやんと、わたしが育ててあげるからね」

でも冬だけは無理。驟に育てさせむに、わたしのことをやめられちゃいやよ?

さて、この子にはなるべく早くに巫女としての力を身に付けさせよ。わらわん家事もできなこといかな。いろいろやることがある。

でもその前に。

この子に名前を付けてあげよう。

いやいやその前に。

今日とこう一寸を、もつとよく味わおう。口に入れてすぐに飲みこむなんでもつたいない。

今日この日が、私と、博麗の巫女と、幻想郷。三人があたらしい道を歩む日だ。

これほど辛くて、うれしこの日は、きっと他にはない。いや、絶対ない。

赤ちゃんが生まれる日は、女として辛くてうれしい日はないでしょ?~

だからわたしがこの日を、幻想郷がつまれた日、と呼んでこる。

自分で唱つのもなんだけビ、悪くない。ぴつたりじゃない。

女の子を手をもぎりあげると、うれしそうに笑う。女の子は

まるで星をつかみとるかのよう、やわらかく夜空へと手を伸ばす。

彼女の伸びた手の方をながめた。

そこには、ひときわ強く光る紅と白、そして紫色の星が、仲良く小さな三角形を作っていた。

(後書き)

紫さまは幻想郷の嫁、という人がいます。
紫さまは俺の嫁、という人がいます。

俺の嫁発言したひとはきっと誰かに殴られておわりだとおもいますが、幻想郷の嫁発言した人は、多くの人に納得されることでしょう。もちろんわたしだって納得です。

でも、すこしだけ、

わたしの考える幻想郷と八雲紫の関係に、耳を貸してもらえないでしようか。

さて、読んでくださってありがとうございました。楽しんでいただければ、とてもうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1785g/>

幻想郷がうまれた日

2010年10月13日17時28分発行